

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可(毎月一回一日發行)
昭和二十四年四月二十八日郵政省特別授受承認第三五二號
昭和二十五年八月廿五日印刷
昭和二十五年九月一日發行

第十六卷

第九號

浄土

九月號

浄土讃歌

伊藤康安

谷川岳に諷經す

佐藤賢順

曠野の念佛行

阿川貫達

限りなき彼岸

佐山學順

1950

9

宗教を説くもの

農夫が生理衛生を説いたら、漁師が經濟理論を辯じたら、奇異の感に打たれる。宗教だけは誰が論じてもおかしくないどころか、かえつてその方が人の胸にひしひしと迫るものがある。

近來、宗教に關する書物が多く出たが、キリスト教關係のものを除くと、その大部分は宗教家でない人々の筆によつてゐる。殊に西田哲學の人々による宗教論が一時壓倒的であつたし宗教雜誌も、これ等の人々を血眼で追い求めた。職業的宗教家にその人を得ないためと、これを聞く人にとつてその方が觀し易いからである。

だがそれでいいだろうか、宗教を説くことは宗教を行ふことであらう。行ひのないところに宗教はない。いかに美辭麗句を並べ、ことば巧みに説明しても、聞く方が成る程と思ふ丈けでは駄目である。一聲の念佛がそれと共に心から迸り出るようなものでなければならぬ。宗教を説くことは易しい然し、眞に宗教を説くことの出来るものは、眞に宗教を行つてゐるもののみである。この意味でも宗教家に宗教を説くものがないことはなげかわしいことである。——高山氏著宗教をよみて——(竹中)

目次

曠野の念佛行……………阿川貫達(12)

教と導……………藤井實應(24)

内省の秋……………(8)

淨土への道……………根本そよ子(8)

淨土讃歌……………伊藤康安(1)

谷川岳に諷經す……………佐藤賢順(4)

過去帳談義……………竹中信常(18)

私の道……………井上純孝(11)

如是寸言……………(16)

限りなき彼岸へ……………佐山學順(21)

芝園だより

淨土讃歌

—阿彌陀經大意—

伊藤康安

西のかた

はるけきところ

世界あり

極樂といふ

ほとけあり

阿彌陀と名づく

その佛

その土にありて

今もなほ

みより御法をぞ説く

極樂と

名づくることは

その國に

住める人々

苦しみを

うくることなく

たのしみの

つくるをしらず

とこしへに

さきくあればぞ

極樂の

淨き御國は

七重なす

玉のおぼしま

うすものゝ

網のたれぎぬ

青垣の

つらなる並木

たからもて

つくりかざれり

七くさの

寶の池は

八つくさの

功德の水を

鏡なす

清らにたゝへ

水底の

黄金の沙は

きら／＼と

波にかゞよふ

聳え立つ

高閣見れば

うるはしき

黄金しろがね

瑠璃に玻璃

赤珠に碼碯

數々の

寶ちりばめ

目もあやに

造りかざれり

池水に

咲ける蓮は

その花の

かたち大きく

赤に白

青に黄色と

とり／＼に

光りかゞやき

色も香も

潔く妙なり

樂の音

御空に聞え

曼陀羅華

雨と降り來て

奇しき鳥

迦陵頻伽は

もろ聲に

法をさえづり

御佛の

功德をたゝふ

極樂の

淨き國には

まがつみの

穢れあらねば

罪とがの

報いもあらず

御佛の

力によりて

ものみなは

そこに生るゝ

極樂に

います佛を

阿彌陀とし

名づくることは

かの佛ぶつの

光あまねく

十方の

國を照らすに

さはること

あらぬが故ぞ

極樂に

います佛を

阿彌陀とし

名づくることは

かの國の

佛ほとけのいのち

はかりなく

限りもあらず

とこしへに

さかゆる故ぞ

あみだ佛

ほとけとなりて

十劫の

年月としつきへ経たり

その御名を

唱ふる人は

まのあたり

佛にあひて

極樂に

生るゝを得む

極樂の

佛の國に

生れむと

願はむものは

かの弘誓くわうせい

心に信じ

かの佛ぶつの

御名を唱へよ

すみやかに

生るゝを得む

南無阿彌陀佛

南無阿彌陀佛

南無阿彌陀佛

(筆者・早稻田大學教授、國文學科主任)





谷川岳に諷經す

佐藤賢順

去年の秋、芝浦工專山岳部の先輩と學生が六人、谷川

岳で遭難した。同行八人で一の澤から雪溪を登つて、屏風の様に切つ立てた絶壁へ挑み、遂にこれを征服したが、もう少しで尾根へ出られるところで、道に迷い、冷たい雨のそぼ降る中をさ迷ううちに日は暮れて、疲れて眠むつてしまつた。二人は朝になつて目醒めたが、あとの六人はそのまゝ長い眠りとなつた。そのうちに私の寺の篤信の檀徒、石原家の信雄君がいた。信雄君は芝浦學園を卒業したのであるが、先輩としていつも山岳部の學生達と山行を共にしていた。

谷川岳へ出かけるといふ二三日前の夜、私は石原宅で信雄君に會つた。山登りのほかに、音楽が好きで、これからどこだかの演奏會へ出かけるといつて、小柄なからだで小脇にヴァイオリンのケースを抱えて出ていつた。

雨がはげしく降つていた。

その後、四五日して新聞は、學生の谷川岳における遭難を報じていたが、私は漠然と山へ行くといつていた信雄君を記憶していたのであるが、谷川岳と彼とがはつきり結びついてなかつたので、新聞の見出しだけ讀んで、また若い人達が大きいやられた、惜しいことに、と思つただけで、その中に信雄君のいることなどは思いもよらなかつた。

ところが數日して、石原家から人が見えて、座につくとまず、「新聞をお讀みになりましたか」と訊かれた。その人の眞剣な顔と、新聞をとという言葉とが、すぐに容易ならぬ事柄に氣付かせた。學校から特報があつて、遭難地へ急行して、山岳部員や土地の人の並々ならぬ努力で死體も搬出し、やつと火葬にして昨夜、持ちかえつた、

ということであつた。驚きと痛ましさに打ちのめされて私は放心したようになつて、この報せを聞いていた。

今年、山の季節になつて、遭難した人々に對する追憶と痛惜は、一層新たになつた。學園の山岳部では、遭難の地の近くに、「雄魂の碑」を建て、犠牲者の精靈を弔うことになつた、準備が進められ、七月二十三日には、その建碑式が行われることになつた。

「あの山の奥のことですから、まだお經の聲など聞いたことはないんです」と言われると、一しよに行つてくれと頼まれたわけでないが、これはどうしても同行して、心からの供養をしてあげなければならぬと思つて、私も伴をする、と申し出た。幸、今年はからだの調子も上々だし、山小屋から碑の立つ高地までの道のりを訊いてみると、どうやら歩けそうな自信があつたので、同行する人には却つて手足纏いになるかと思つたが、ついてゆくことにした。

石原家からは私を交えて四人。前日に立つた。山岳部のキャンプまで行くには時間がなく、土合の山小屋は土曜日のことではあり、谷川岳登攀の學生達で満員である

うというので、水上に一泊した。そして早曉の列車で土合驛へ行き、その近くの山小屋で集合した。六人の犠牲者の家族が思い思いの服裝で集つてきた。一行は十五、六人になつた。

快晴である。空は高く青い。近くの峰に白雪の一片が纏わりついている。

山岳部の先輩が先頭になつて、七時半に一行は出發した。なかには弱々しげな婦人も交つていた。その人はたつた一人のいとし子を山に捧げてしまつた母親であると聞かされて胸のつまる思いがした。結婚後まだ間もない夫を亡くしてしまつた若い未亡人もいた。

山道の柔らかい感觸が、地下足袋の裏に心地よい。澤を二度渡つた。冷たい水が音を立て、流れる溪流を、石ずたいに飛び越えるのである。二度目の澤には岩に大きくマチガ澤と書いてあつた。もつと行つて三度目の澤へ出ようとする所に、やゝ廣い空地があつて、そこへ出ると、思はず眼を覆いたくなる光景が現れた。新しい木の墓標がずらりと五六本、立ち並んで、その周圍には石が積み上げられている。どれもみなこの山で遭難した若人を弔うために立てられた碑標である。山百合や名もしれ

ぬ山の花が供えられ、縷々として香煙が立登つてゐる。或る墓標の前では若い男女が額すいて合掌し瞑目していた。私は、歸りには一つ一つ讀經し回向して、と心に約して、急ぎ足に澤へ下りようとした。

「三島君はこゝに倒れていたんです。」と同行の古川氏が言つた。先輩の一人は救援を求めに、こゝまで下つてきたのであつたが、もう一息という所で、ついに精魂つきてこゝで事切れたのである。市の倉澤と國道の出合という所である。

澤へ下りると、その僅かの廣場にも、あそこに二本こつちに三本というように、また幾本かの墓標が立つていた。澤の向う側の小高い所に幾つかのキャンプが張つてあつて、そこに寝起きしている學生達が、線香を供えながら順々に拜んで廻つてゐる。異様な風體である。登山帽に登山靴、尻にはかもしかの毛皮をぶら下げ、腰には山刀を差している。いかにも山男といういでたちである。しかしその拜むときの敬虔な態度は、強く惹きつけるものがある。半月ほど前に、私は或る所で、青年達と庭談會をしたが、佛壇にお線香を上げて拜め、といわれども、どうしてもそんな氣になれないのです、というニ

ヒリスト達であつた。自分は共產主義者ぢやありませんよ、と特に斷つていたが、どうしても拜めないというのである。私は、それを青年にありがちな氣持で、むしろ當り前だと思つていたが、今、この山男達の敬虔な様子を見て、やはり人間の本性には、清きもの、尊いもの、高きものゝ前に額すく氣持があるのだ、とつくづく思い返えした。山男はいゝな、と何度も反芻してみた。

こゝで一行は山岳部の人達と一しよになつて、顔見知り同志は挨拶を交わして、溪流の岩に腰を下して懷し氣に語り合つた。指導者の加藤先生や増澤先生に紹介された。はるか彼方に、堅い雪を深々と包んだ雪溪が見える。雄魂碑の建つた場所はこゝからまだ三十分も澤を溯つたその雪溪の登り口なので、少憩の後、學生達と一しよになつた四十人近くの一行は、更に岩ずたいに溪流を溯つた。岩飛びの困難な所では、學生諸君が巧みにザイルを張つてくれるので、それを傳わつて、向へ飛び移つたりした。十時近く現場へ着いたが、解け残つた雪が、右岸にも左岸にも、五六尺の層をなし、すぐ目の前には雪溪が大きく口を開いて、そこから雪を解かした清流が淙々とあふれ出て、急湍となつて岩を嚙んでゐるので、

いかにも山深くきた思ひである。雪の上を撫でてくる身を切るような風と、焼石から舞い上る生温い風とが、巖壁にぶつかつて交流している。

やゝ小高い右手の巖壁に、一尺に一尺三寸位の合金製の板に刻文されて、碑が嵌め込まれている。小澤君以下六君の氏名や生年が刻まれ、遭難の経緯が録されている。「冥せよ岳友、默せよ親友、しかして吾々の山行を永遠に見護り賜へ」という最後の追悼の一句は、同僚諸氏の衷心からの言葉で、切々肺腑をえぐるものがある。

その前に山百合の花が捧げられ、くさぐさの供物が供えられ、香が焚かれた。學生の手で準備はすつかりでき上つた。碑を覆っていた布が除かれて、建碑式が始められた。私は心をこめて諷経した、雪溪に木靈^{こだま}せよ、巖壁に反響せよ、とばかりに——。しかし心持だけはそうであつたが、ともすると、その聲は、潺々^{せん}として響く谷川の音に、遮ぎられがちであつた。主催者や遺族の惻々^{さくさく}として涙をさそう哀悼の言葉があつた。あとで、私は法華經の「我れ常に此に住す」という一句を引いて、尊い犠牲者の精神が、こゝにとゞまつて山行の人々を護るに違いない、という話をした。

歸り途には、さきに心に約した通り、遭難者の墓碑の一つ一つを回向して廻つた。

瑣事

人生を幸福にするためには、日常の瑣事^{さじ}を愛さなければならぬ。雲の光り、竹の戦^{たたか}ぎ、群雀の聲、行人の顔、——あらゆる日常の瑣事の中に無上の甘露味を感じなければならぬ。

人生を幸福にするためには？。——しかし瑣事を愛するものは、瑣事のために苦しまなければならぬ。庭前の古池に飛びこんだ蛙は百年の愁を破つたであらう。が、古池を飛び出した蛙は百年の愁を與へたかも知れない。いや、芭蕉の一生は享樂の一生であるとともに、誰の目にも受苦の一生である。我々も微妙に楽しむためには、やはり微妙に苦しまなければならぬ。

人生を幸福にするためには、日常の瑣事に苦しまなければならぬ。雲の光り、竹の戦ぎ、群雀の聲、行人の顔——あらゆる日常の瑣事の中に墮地獄の苦痛を感じなければならぬ。



浄土への道

根本そよ子

終戦になつて、一番嬉しかつたことは、長い間、掩つたままの、燈管用の黒布を取り外したことと、不恰好なモンベを脱ぎ捨てたことでした。

あの遮蔽した、陰氣臭い燈火の下で、得體の知れない雑粉をこねたものを、これも乏しい調味料で、どうやら調理した粗末な食事を、ぼそぼそとかき込んだ、あの惨めな戦争中の出来事が、遠い悪夢のやうに、腦底の片隅にいまでも映像されてゐます。

そして、モンベも……。これは働き着としては、たしかに重寶なものでしたけれど、これが、常住、寸時も身邊から離せないとなると、少なからず殺風景なものでした。どんなに工夫して、形を變へたり、晴着をつぶして作つて見ても、モンベはやはりモンベで、ともすれば、ずり落ちる後紐を始終引張り上げないと、まるで腰布圍を背負ひ込んだやうに何としても收拾の出来ない不恰好なものでした。やはり、美を愛するのは、人間の本能なのでせう。

勿論、生死の境を彷徨する土壇場で、そんな悠長なことを言つたら、それこそ國賊扱ひにされたでせうけれど、どんな場合にも、身嗜みを忘れなかつた、昔の女性の心の張りとか、躰が、今更のやうに奥床しく思はれます。

ともかく、こんなことが氣輕に言へるやうになつたのは、全く誤つた戦争によつて、根こそぎ奪はれた「自由」が、再び私達の手に歸つて來たからでせう。それなのに。又して

内省の秋

朝夕にふむ僧堂の廊にさえ、秋の冷氣が感じられるようになりました。秋のお彼岸がまゐります。私たちの生活の中で、やはり季節感は大なる意味をもっているようです。春のお彼岸は、すべての自然が萌えたつてゆく、祖先への感謝の想ひの中にも、そうした將來への活力がみなぎっている感じがします。

秋のお彼岸は、二百十日もことなく過ぎて村の祭りの太鼓をきき、みのりを收めてゆくときだけに、苦しかつたにせよ、樂しかつたにせよ、自らそこには内にふかく省みる心のしみじみと湧き起つての、祖先への感謝といつた姿が感じられます。

秋は内省のときです。おのおの、ふかく省みることの、少なくないことでせう。夏のあつさも、たゞ氣候だけではなかつたようです。いろいろの問題が身邊にまき起つていました。

私の住んでいるこの県では、ずいぶんと日本腦炎や赤痢などが流行つて、毎日の新聞記事となり、何か子供をもつ身に息づまるよ

も、あの恐ろしい世界動亂の兆しが、だんだん身近に迫りつつあることは、何といふ人類の悲劇でせう。

同じ人間であるのに、何故、かうして、傷け合ひ、殺し合つて、戦はねばならぬのでせう。世界の人類はたとへ、種族が違ひ、國力の強弱があつても平等に生きる權利と、自由に幸福や平和を希求する欲望とを與えられてゐます。ところが人間の欲望には果てしがありません。勿論、適度の健全な欲望は、人類を向上進歩させ、幸福にする一つの手段でもあります。誰しもつひ、次々に現われる欲望の誘惑を制し切れず、自他を顧る一線をふみこえて、それが野望となり、やがては貪欲におち、知らず知らずの間に争ひの根をおろしてゐるのです。例えば家庭争議にしても、勞資の紛糾にしても、また戦争も、すべては争ひの原因が、双方の貪欲や我執に端を發してゐることを見てもはつきりと裏づけられると思ひます。

エブラハム・リンカーンが「人間は戦争するにしても、いつもいつも戦つてゐるわけにはゆかない。双方が多く損失を蒙つて、何も得るものがなく、戦をやめた時、あとにはやはり元の未解決の問題が残るだけである」と言つてをりますが、至言であると思ひます。

よく些細なことから口論して、拳骨を振り上げたり、胸倉を掴んで、暴力で解決しようとしてゐる、喧嘩を見ても、お互に血を流したり、怪我をしたり、結果においては却つて二人の感情は、一層悪化してゐるやうなものです。

「柔よく剛を制す」とか、「愛は剣よりも強し」と、いふ言葉がありますが、争闘の眞の解決は、暴力よりも、温い春風のやうな慈眼愛語を以て諭す方がずつと効果的であることは、誰もが知つてゐる事實なのです。

愛は、言ひ換へれば、絶對のみ佛の慈悲のこころに通ひ、更に宇宙の根本生命です。「眞

うな想ひさえいたしました。そうした中で病に對しての心がけの何か、全く筋ちがひの人々の姿がこの科學心の進んだという世の中に、まだまだ少くないのを知りました。新聞にまで書かれて人々の心の眞の目覺めを求められたその一、二の姿を申して見ませうか。

Tといふ町で子供が發病したときに、その家の近親者が××教の信者であつた關係から醫者にも見せずに、患者の枕もとで「助け給え」とお祈りをしていたが、遂に重態となり五日目になつて漸く醫者を招いたが、もう手おくれで翌日死亡したという話があります。子供は疫痢だつたのでした。また同じ町で、之また「南無×××經」と盛に祈つてゐるのを、役場の衛生吏員が發見し、醫者を伴れて行つて診察したところ赤痢だつたという話もあります。新聞は、傳染病、「迷信で續發」と大きな見出しをつけていました。多くの人たちは、こうした記事を案外に馬鹿げたことだ一笑に付してしまひます。しかもそうした人がこうした場面にぶつかつたとき、意外にも同じような穴におちこむものであります。

如——眞、善、美——の世界と連關性があり、又、極樂淨土に充ち満ちてゐる、尊い命の光とも言へませう。私達は生れる前に、きつと極樂に住み佛の慈悲に包まれてゐたので不幸にして逆境に落ち、どんなに荒んだ心になつても本能的に慈悲の心に同化する意識が、潜在してゐるやうに思はれます。これは又、誰の心にも宿してゐる佛心とも言へませう。

日本は敗戦による目覺めの、心からの聲として永久に平和國家になることを世界に宣言いたしました。それは戦争によつて失はれた佛心が、再び芽生えて來たとも言へませう。本當に有難いことだと安心したのも束の間、又しても、暗澹とした戦雲が、慈悲の陽光を遮つて私達の頭上に掩ひかぶさり、佛心の萌芽を抑壓しようとするのです。

しかし、今こそ私達女性は、あらゆる困難に打ち克つて、血腥い戦禍に捲き込まれることなく、その高貴な魂を、必死に守り育てていかねばならぬと痛感いたします。

男女は同權であります、その使命は自ら違つてをります。女性には、母性愛といふ佛心に通ふ情念を惠まれてゐます。貴賤貧富の別なく、平等に幸福と平和を齎らす陽光のやうな佛心を湛えてゐる女性は、誰にも愛され、尊敬されるものです。

この風前の灯のやうな世界の危機に直面して、女性のなすべき任務は、平和と幸福の表徴である佛心——慈悲——をめいめいの心に深く植えつけて、お互に、廣く隣人に惜しみなく頒ち合ふことだと思ひます。

冬の間降り積つた深雪は、寒い北風がいくら吹き募つても、決して溶けません、春陽が無言でちつと慈悲の光をそそぐと、他愛なく、溶けてしまふやうに、淨土建設は、暴力革命でなく、佛心の散華を、一人一人の心に撒き散らすことです。一滴の水が凝集して、大河となるやうに、女性のさゝやかな歸依の心が、世界の嵐を靜める平和への曙光ともなれば、正にこの世ながらの淨土顯揚の道も間近であると申せませう。

戦後の新興宗教とよばれるものの續出は、

おどろくほどの數に上つており、問題を起してはニエース面に現われて人々の目をひいていますが、それらの中には、宗教の名で呼ぶよりは、明らかに迷信といつた方がよいものも少なくはないにもかゝらず、相當多くの大衆がなほそれにひきづられ、からみつかりてゐるのであります。このことは大きな問題だと思ひます。ひとびとが、どんなにか心のよりどころを求めているか。ワラをもつかむ想ひですが、いついてゆく姿、心のより所を失つて、頼みなき一本のわらにさえすがる姿をみて、たゞ迷信に迷う人々としてそれらを捨て去ることはできないのでせう。

この事實は他面からみると、既成教團の無力ということにもなります。ほんとうに正しい佛教の教化力がふかく一般の生活の中に及んでいないから、いかゞはしい宗教があつて絶たないのではないでせうか。正信は、たゞ儀式の中に、あるいは學理の中にだけ潜つてゐるのではないでせう。秋の彼岸に、私は「淨土」のためにも、會友とともに内省をふかめたい。(藤田寛雅)

人間には色々な道があるものですね。何かある目的を持つて坦々と歩んでいると自分では考えていても、全く思いもかけない時にともない方向に進んでいる自分を発見します。私事にわたつてまことに失禮ではあります。が都會のどまん中に所謂人生五十年の半ばを無我夢中におくつてしまつた私が、執着未戀限りなき都を落ちてしまつたとは一體誰が舵をとつてゐるのかと不思議です。

小さな人間の思慮など超えていきます。もがいても無駄です。都會で尖端文化人(?)の誇りを持つて育つた私には「いなか」

は親鸞聖人の越後配流とくらべてもよい位私には縁のない世界であつたのです。

一體私と云う人間はすぐ周圍の世界へ順應してしまふらしいのです。都會はいゝなと思つていた私が田舎の空氣の中で呼吸をしてみると、田舎も悪くないなと思つてしまふのです。いや田舎へ流れて来て、私は法然上人の「境涯の縁に順う」と云う言葉を想ひ起し、

私の道 井上純孝

「こゝも亦私の住居だ」と達觀(?)した譯です。あの封建的にをい濃き「郷に入つては郷に従え」と云う言葉は嫌いですが、自己を一應否定して新しい自己を発見する——新生とも云えましようか——ことは人間の我執我慾限りなき事を思うと大變必要なことでしよう。「貧愛瞋憎の雲霧」(「正信偈」より)をおい拂つて人間の心性の美しいものへ近寄つて行く

氣持ちが海と山と田圃の中の存在へと轉回した私に喜びを與えてくれました。

さてこれまで語つて私の田舎巡業(人生行路の旅役者と思えば)のよ

つて來つた原因はと申しますと、あの戦争のためです。私は兵隊となつて支那を二年餘り歩き廻り、復員したら生家は既に土臺石しか残つていませんでした。家族全員健在なりと知人の言葉で私はすっかり聖者(?)になりました。本來無一物！嘘ではありません。ふだんは悟り切れない凡夫と思つていてもそうすたたものでないことをさつた譯です。「門

僧で」不知不識の裡に法然上人の訓えが心の前の小どこかへ浸みこんでいたのでしよう。「墨染」「十惡五逆」「愚痴の法然房」……と云つた否定的な、遠慮深い——否自己を對決せしめた普通の人より一廻り粹の大きい、それ故に人間慾は論外であつた上人の導きが私をして戦争禍何ものぞと思わせたのでしよう。この點幼兒から父の型にはまらない精神教育を感謝しています。

私は今常夏の國房州で田舎教師をしていきます。併しもう所謂「田舎教師」を輕蔑的に呼ぶのをやめましよう。時々惡魔(都會第一主義と云う、又文化と近代が東京に集中しているとさゝやく所の)が顔を出して風の夜など私を孤獨にしますが、もつと「はからい」をすてましよう。

「人間には色々な道があるものですね」と書き出してだらんと列べましたが、よく考えると一つの道を人間の眼が三つにも四つにも見ちがえているのかもしれないね。

法然上人と親鸞聖人におつかえする自分が道を二筋に考えるか、又一筋だと思ふかは自分の眼がいゝか悪いかの檢眼テストでしょう。私は今人生の第二幕を歩んでいます。それは一つの「人生劇」の中に於てなのです。

現代妙好人傳 四

曠野の念佛行

阿 川 貫 達

私は去る五月中旬未知の人、元満洲開拓青年義勇隊嘉見中隊長であられた嘉見伊勢太郎氏より、隊員森井政雄君の正念往生についての略報をいただいた。洵にありがたく感佩したので早速詳報を御願いたしました所、御繁用中次の如き玉章にそえて原稿を拜受したので、原文のまゝ掲げていたゞくことにした。こゝにも阿彌陀佛の救ひのありがたさが偲ばれて尊い事である。

x

濃緑滴たる候

御尊師御清健を祝し此の度の御縁を謝します。文拙なく意の儘ならず、唯、私の教へ子が死に直面して私共に教へてくれた事を嬉しく有難く思つてゐました。何かの機会に記録してゆきたいと考へて居りました。私は念佛が好きです。私は二十二三歳の頃村の青年團長で村の莊樂寺と云ふ寺の和尚さんに可愛がられ名越隆成師に親しくなり、酒井教順僧正には殊更に教へられました。昭和十五年には、

姓を忘れて一寸失禮しますが津の出身で後に知恩院の執事長をなさいました僧正の五重相傳、十六年には伊藤宏天師を招き中堅青年の養成講習會を開く等念佛に近づき、昭和十八年渡滿のときは名越師の傳道袈裟を持つて渡滿しました。

敗れて歸還直ちに縣の要請ありこの山に元の青年と共に入山、拓山興原の苦行を續けて居ります。別紙の如く此の山は往昔、山岳佛教の盛んな時代があり、山陰文化の中心をなしたとさへ傳へられて居ります。標高七〇〇米、尋常一様な開拓様式では拓けません。同信協力の念佛開拓です。

將來は地方青年の修養園として開放します。山の持つ指導性は坊床讃歌の示す通り凡眼ながら優秀だと思ひます。

私共の苦行が稔り附近の各村に覺醒の鐘の音が流れる日を誓願しつつ、

六月八日

嘉見伊勢太郎拜

皇國農村建設を目指し、澤山な日本の青少年が滿洲に渡つた。私共は東滿總省密山縣の興凱湖の邊りに、ソ聯と境を接しながらも風光絶佳を愛でつゝ、開拓者としての訓練を續けてゐた。昭和二十年八月九日早曉、默々十年の國境は火を吐いて、時ならぬ鐵火の雨に見舞はれた。知事から贈られた國旗に、皇太神宮、出雲大社の御神靈と、死亡青年の分骨その他重要物件を包で私の身につけて、十八歳前後の青年隊員二〇〇名と共に退去行動に移つて五十數日間、東滿山岳地帶を選んで南下行軍の苦行がつゞけられた。元淨土宗從軍僧名越隆成師から片身として贈られた北支のあかのついてゐる傳道袈裟に珠數と軍刀を握つて密林地帶を衝いての念佛行はまさに白道を踏むものであつた。

三百里を踏破して九月三十日吉林市に到着、郊外のセメント工場の一角に、骨肉も及ばぬ友愛生活が始められた。強き者が稼ぎ、弱き者を養ふ。不幸にして翌二十一年二月より發疹チフスが入り拓友相次いで伏す。全員罹病して稼ぐ者なく、醫藥を施すに術なく、私と他二、三の青年が以前に發疹チフスをやつてゐたので、晝夜の別なく看護に當つた。平素身體の弱い者、行軍中身體をいためた者等には、胸部の防衛に特に注意と手當とを怠らなかつた。

島根縣那賀郡岡見村出身の森井政雄君は、十九歳の頑丈な青年であつたが、行軍中から身體の具合が悪く、吉林に到着と共に他の青

年と共に病院に入れたが、間もなく退院してからは元氣に働いてゐた。發疹チフスの時も十分注意して一度は快くなつたが、腹膜炎が再發して四月の始から休養してゐた。

私は隱岐島の出身で故名越隆成師とは親しく、故酒井教順僧正等の五重相傳會にも二回加はり、其の他念佛弘通の師に教へを受けたので、滿洲でも中隊本部に佛壇を設け、朝夕木魚の音が煉瓦建ての固苦しい窓から曠漠千里の沃野に流れた。拓友の死に對しては命日毎に青年と共に佛事を營んだ。春秋二回の彼岸には國民修養日として家庭的な念佛修養會を開いた。吉林に來て破れ服に麻袋をかぶつて寝るやうな、内地人の想像もつかぬ最底生活をしてゐても、朝夕全員集つて念佛の行儀は營まれた。國の力も同胞の援助もなくなればなくなるほど、周圍が暗くなつて生死の崖頭に立てば立つほど、念佛の本願力にすぎるより他に頼るものがない。

森井は四月二十日頃になつたら動けなくなつた。腹は次第に太くはれてくる。快復は出來ないと思つたから、附添ふ青年に特に注意を與へた。彼を見る度毎に臨終の苦しみを想像して胸が痛かつた。次第に苦痛を訴へ、起したり寝かしたりの操作がはげしくなつてくる。四月二十三日の朝から意識不明瞭になつて、水の音が聽える等とうは言を口走つてゐた。夕方少し落着いたので附添ひの青年に、今晚は特に警戒を要するから、變つた事があればすぐ自分に知らせるやうに言うて別室の炊事當番室で休んでゐた。

しばらくすると森井が呼んでゐるといふのですぐ行つてみると、
「中隊長先生」「中隊長先生」と呼んで居る。彼の手を握つて聲を
かけてやると、今迄の苦痛は跡形もなく、次に「お母さん」「お母
さん」と呼んだかと思つたら、六十名位收容する部屋の端々迄も聴
えるやうなはつきりした聲で「南無阿彌陀佛」「南無阿彌陀佛」と
念佛を稱へはじめた。一緒に部屋に寝てゐる青年達に、森井の臨終
だから皆起きよと云ふと、麻袋をかぶつて寝てゐる青年達が皆起き
た。

私は森井の手を取つて合掌させた。半眼に開いた静かな目、平和
な顔、「心顛倒せず、心錯亂せず、心失念せず、身心に諸の苦痛な
く、身心快樂にして禪定に入るが如く」大往生の莊嚴を、苦力小屋
の中に拜するとは、何たる有難い事か。森井の念佛の聞は次第に細
つてくる。周囲の青年達の聲は次第に高く、念佛往生の一大事が往
く者と送る者に依つて導びかるるままに行はれた。森井の唇だけが
動いてゐる。私は勿體なくて涙で聲も出ない。青年達も泣いてゐ
る。何處かでソ聯兵の拳銃の音がする。

翌日火葬にして遺骨は歸還するまで私のそばに置いた。二十一年
七月二十五日遣送命令が出て吉林市を立つた。數名の犠牲者の遺骨
を抱いて滿洲をあとにする私の胸は痛かつた。當時私が作つた「あ
ゝ青雲よ」の歌を車中に合唱して青年達と涙を流した。一節に

あゝ亡き友よ今頃は夏草繁るその下に

恨みも盡きぬ北斗星夜明けを待ちてゐるものを。

大和民族の一大悲劇は終つた。北の國夏草の下に、平和な夜明け
を待つてゐる拓友を残して有史以來の引揚部隊の中に入つた。

九月歸還すると共に遺族を訪問した。石見路は眞宗の盛んな地
だ。森井の宅を訪れて佛壇に對して、なるほど家は農家をして普通
であるが、佛壇の立派さに感じさせられた。氏より育ち、育ちが一
生を支配する。森井の兄さんも比島レーテで戦死、遺族は老父母に
女子二人の平和な家庭である。

法號 祐宣院釋政信

昭和廿一年四月廿三日死亡

合掌

坊床讃歌

頃は弘仁九年の春に 衆生濟度の佛の誓ひ

弘法大師は旅わらじ あまたの弟子と諸共に

杖をとゝめた坊床山は 能義の郡の比田の里

鐘がなるく坊床山に 伯耆出雲の善男善女

杖を力に發心坂を 登りつめれば蓮の山

渴く衆生に與へんものと 大慈大悲の七つの池に

金銀瑠璃玻璃敷きつめて 八つの功德の水を盛る

千樹萬樹に微風吹いて 晝夜六時に五百鳥うたふ

百千萬の法の聲 此の世ながらの極樂淨土
 猛き心も音然川に 清淨心と流るなり
 年は流れて月星移り 落葉々々に道ふさがりて
 法のわらしの跡も絶ゆ 有爲轉變の世の中よ。

時しも昭和二十一 秋錦繡の霜の月

敗れよごれた祖國の土に 國を興すの誓願起て、
 集ふ島根の若人達が 文化日本のさきがけと

彌陀の利劍の鋏を振り 法のみ山の山開き

敗れて嘗める辛酸に 人の心は秋の月

つとめて流す汗と血は 自他法界をうるほさん

末は濁れど源は 流れも清き澄川と

加徳の水は永遠に 坊床山の名と共に

興る日本の礎と なるぞうれしき村造り

鐘がなります坊床山に 四十八谷の明けの鐘

第三回宗學大會愈々開催

——十月、東北仙台に於て——

京都、東京と相次いで開かれた宗學大會は、その第三回を東北仙台の地に豫定され、今春來その準備を進めて來たが、東北各教區の絶大な協力賛助によつて、いよいよ實現の運びとなり、教學院から正式發表が行なわれた。

殊に今回の大會には、教化講習會に併せて宗學研究の最高水準を示し、教化と研究の眞の一體化の實をあげ、宗門教學に寄與するもの大なることが、今から期待されている。

高島佛教大學長、石井正大教授の教化指導講演を始め、凡そ二十名の宗門教學界の新進中堅の學人がその研究の成果を提げて、一堂に錦繡を競うものであり、けだし東北教界空前の盛觀を呈することであり、廣く學界に與える影響また大なるものがある。

時 十月六日(金) 七(土) 八(日)の三日間

所 仙台市東十號地天神下 願行寺

なほ大會發表の研究は、直ちに大會紀要として公刊される豫定。

南原總長と吉田首相、理想論と現實論。ひ
つくりかえしていえば、淨土論と娑婆論。一
方は一方を頭ばつかりだといひ、一方は一方
を足ばつかりだといひ。淨土には足のある人
間がないからかも知れぬ。お化に足のあつ
たためしはない。

だが足なんかなくともいい。せめて幾千萬
本ある此世の足共の上につかる、たつた一
つの頭でありたい。

◇

先月號に編集長慨嘆
して曰く、平和論出で
ず、と。出るたねがな
いからである。今日の
本をまるで他人様の空

如是寸言



アロハのニイサンと、特攻くづれとが、暑
さにのぼせかえる車内で立話しをしていた。
「やんなつちやうな、金もなし、仕事もなし」
「おまけに、あの子にももてず」
「バーンと、はなばなしくやりてえな」
「そしてのびてももともとか」
恐るべき偽勇兵である。

◇

だ。
獨立分派は、時代的現象でやむを得ぬ。何故
つて、現在はその、原子核破壊の時代だから
ね。とおさまつていてはもう時代遅れ。水素
爆弾はその逆ですぞ。

◇

纖維品は絶対に統制しない。というからみ
んな買い漁る。買うから高くなる。高くなる
から早く買おうとする。また十年前の馬鹿を
くりかえすらしい。佛教者よ、このぐるぐる
まわりの因果の鎖を、迷妄と斷じて、はつし
と斧を下ろそうではないか。道は近くにあり。
輪廻はお寺の門前で、お寺の臺所で、お
寺の簞笥の中で、ぐるぐるとまわつてゐるで
はないか。

◇

屋に假住いしている積りで暮しているからで
ある。日本は戦争によつて領土は辛うじて残
こされた。が、心の祖國を見失つてしまつ
た。土のない所に種はおちぬ。まかぬ種はは
えつこない。編集長よ、平和論の花を咲かせ
る前に、まづ種をまく地面を見つけよう。白
い土か、赤い土。

◇

淺草の仲店は九十度轉回した、南北が東西
になつた。仲店の奥が觀音様と思つて歩いて
行つたら、日本館の切符賣場にぶつかつた。
お賽錢を拂つて入つたら、ギヤング映畫で満
員だつた。

仲店が廻轉したのに足並揃えて、淺草寺も
大いに轉向して淺草宗を打ち建てた。來年か
ら宗費が四、五十萬かかつて来るからだそう

「もう絶対に疎開しない」
心の底からの叫びを女達はわめく。がその
口で、何故
「もう絶対に戦争をしない」
といわないんだらう、まだまだ、戦争は男だ
けがするものだと思つてゐるらしい。

◇

釋尊は靈魂の存否をたづねられた時、だまつて答えなかつた。ないと思うものにはないと、あると思うものにはあるという意味にとれる。が、ないとしてその後の佛教は進んで來た。そして坊さん自身現在非常に煩悶している。精神的にはなく、なりわいの道に於いてである。

ないと言い切れば明日から寺は保てない。あるといえど町の宗教家と同列になりさがる。はてさて思案の擧句、お釋迦様の眞似をして黙つてしまつた。

◇

「人間の人格には超物質的乃至は靈的な何物かがあるだろうか」ひらたくいえば、靈魂は本當にあるのだろうか。問題をくりかえしてゐるのではない。これは現代アメリカが心理學の泰斗ライン博士が發して、自らこれに答えて

「然り」

といつてゐるのである。世の宗教家よ。佛教者よ。自分等の「はたけ」を異國の科學者に耕やして貰つていていいだろうか。

科學は實證だ。信仰はこれに先立つもの。

科學が靈魂の實在を證明した後から、坊さんがついて行くのでは、だらしがなさすぎる。今からでも遅くない。早く、信念を吐露したまえ。——ライン博士著、瀧川清子氏譯心理の領域——超心理學——がその決定に當つてよい參考になると思われる。

◇

また最近、まこと教團の吊し上げ、靈友會の脱税事件などが新聞種になつた。戦後こうしてニュース面に色とりどりの角度から正體を照射された新興教團は、どうも覺え切れな程である。新興宗教にもピンからキリまである。新聞や雑誌はとき折、これを把えては論評している。

それらの論評の方向は、おほむね戦後の人心の不安といふところに、注意を向けて行つた様である。人心の不安定はどこから起るか。公式論で言えば、社會生活の不安定といふところに歸着する。食うや食わずの状態におち込んだときに、人はもはや何ものを信ずることが出来ないか、或は何ものでもかまわず、信じて之にすがりついてゆくか、この二つのうちの一つだ。

インチキ宗教のはびこるのは、後者に屬する現象に違ひはない。だが、人心の不安定は生活のみの間頭だろうか。衣食住に不自由がなければ、それで人はこの世に安然として生きてゆけるだろうか。眞の宗教が活動する場面こそはここにあるのではないか。眞實の宗教が、宗教としてのはたらきをしていたら、インチキ宗教がつけこむすきさえもないはずだが。

草 庵

鳥居良禪

庵の庭は

莽莽たる林の中に埋れていた

夏も終るころになると

井戸のあたりに夕顔が小さな花を開き

椒の木の小梢が

漆塗りの扇のように明るくなつて行つた

過去帳談義

竹 中 信 常

戦災を蒙つた昭和二十三年五月二十四日の拂曉、まだその頃は元氣だつた老僧が、小間使を連れて焼跡へ歸つて來た。夜の白々と明けかかつた境内には、未だ餘燼蒙々として、立木の青くいぶる臭いが四邊を立ちこめていた。

本堂玄關の破風から火が吹き出し、棟が落ち、やがてそれもおさまつて行く姿を、美しい夢のように呆然と、墓場の石に腰をおろして見ていた私の眼前に、老人が無言で立つた。右手に釋杖をつき左手には一包みの荷物を下げて、靜かに過去十年來の夢の跡に立ちのぼる焰と煙とをちつと見つめていた。その顔には何の憂いも悲しみもなく、明けて行く空の色にも増して深く澄んでいた。

今、私の寺で使つている過去帳五冊はこのようにして、老人の手に運ばれて焼失を免れたのである。

伽藍も焼け、境内も荒れ、庭も菜園に變つてしまつた今日、變らざるものは、三百年の秘やかな歴史をその頁にひそめて机上に積まれてある過去帳五冊のみである。それには無論寺録も記るされ、また今は絶家してしまつた檀家の家々の代々の戒名、さては三月十日

一夜にして四十萬の人命と數千億の財産をなめ盡した劫火にまかれた人々の悲しき記録が残こされている。歴史というものが書き變えられて、權勢史から庶民史へと大きく轉回した今日、その最もよき資料の一つとなるのは過去帳である。戦争前と後では、世相は過去帳にまでその變化を示している。試みに繰つてみた大正より昭和二十年までの頁の中で、朱書されてある家出人、自殺者の數は總數十指を出でぬ。二十年八月を境として爾來近々五年間で、それは五を數えている。

戦前は幼児の死亡率は大人の三分の一にも當るのが、戦後にはこれが五分の一にも達せず、且つ總體的に、死亡者數は二十四年度で戦前一年平均の半數以下となつている。無論出生率とを比較して始めてはつきり云えることだが、とに角、拙寺の貧弱な過去帳のみの語るところを要約すれば、死亡率、特に幼児の死亡率は戦後著るしく減つている。これは戦後の社會事情、醫療事情の好轉を物語つており、日本人の平均年齢がどうやら延びて來たと考えるのは虫がよすぎるか。但し、變死者の一時的増加は混亂變動の暗い一駒を映ずるものであろう。過去帳から離れるが、拙寺の法事年忌執行率は終戦直後の五〇パーセント以下だつたのが、本年上半期の七〇パーセントにのぼつたことも人心安定、世相平靜のすべり出しと見て差支えあるまい。

一寺のささやかな過去帳にすら、大きく世界の波のうねりは精確に跡づけられている。恐ろしいことであると共に、これをもとにして佛教信仰史、而も本當に民衆の間に生きて來た佛教信仰の歴史を

描くことも望まないことではない。

過去帳は別名、冥簿、靈名簿、鬼簿とも呼ばれ、古くは常樂記とも名づけられたこともあつた。それは永仁三年（一二九五）に始まる記録であつて群書類聚五十四巻に收められている。また下總國小金町本土寺の過去帳の序文には

「梵漢和三州之過去帳緣起。月氏に於ては、中天竺摩竭陀國解脫生死寺、大過去帳を作り所修の功德を回向す。名帳衆三萬七千餘人也。……次に震旦に於いては、白馬寺（本名を招提寺という）國清寺（天台止住）等これを認む。毎日廻向して退轉することなし。……日域に於ては、日枝山延曆寺、貞觀年中前唐院大師始めてこれを記し置く。よりて速やかに妙果の直因と成る。夫より已來、南都北京諸寺諸山、此所修の方法専ら盛ん也」

と記されている。だが印度に、現在日本にみられるような過去帳があるとは思えないし、また、死者に戒名をつけることは中國に始まつたといわれる故に、どうしても過去帳は中國か日本に始まつたものらしい。

過去帳には死者の戒名と、死んだ年月日と、俗名と、詳しくは年令及び戸主との續柄などをしるしてある。その記載の順序は歿年順に書き流して行くのと、一日より三十一日までの各日別に書込んでゆくのとある。日別の中には、各日に神名、佛名を配し、例えば一日は熱田大明神、二日は諏訪明神などとその冒頭に書くならわしもみ

られる。そしてこの方は日別回向として朝の勤行の時に、その日に歿した檀家の諸靈を回向するのに用いられることが多い。

過去帳が日本の寺院で今日のように重要な役割をするようになったのは、徳川時代の切支丹禁制による宗門改めが大きい力をなしている。宗門改めは生きている人間が必らず何處かの寺の檀家であつて切支丹でないことを確める制度で、これには踏繪佛檀改め、密告、五人組などの方法を用いた。そして、過去帳は各家の戸籍簿の役目をもつていて、一家の系譜は寺へ行つて聞けば分るとまでいわれるようになった。

ところで、過去帳というのが、過去のことを記した帳簿という意味であるからには、過去に對する未來があるわけだが、これは一寸無理なことである。せめてそれなら現在帳は、ということこれは確かにある。類聚名物考という本の第二十四巻に「傳えいう、昔南都の西大寺には、過去帳、現在帳とて二つ有り。過去帳には死したる人の名を書付て廻向し、現在帳には生れたる人の名を付けるとなり」

とある。但し、その實物は見られないが、西大寺は天平寶字元年（七五八）の創建であるが、承和十三年（八四六）火災のために寺内の諸堂が焼けたとのことである。それ故にこの現在帳も傳わらぬのではないかと思われるが、とに角千二百年も昔、既に現在帳を作つていたことは、佛教は死人のためのものではなく、生きているもののためだと今更こと新しく騒ぎ立てる要もなく、佛教の本當の姿

を示めしているものということが出来る。

今日、寺によつては戸別過去帳とて、檀家各戸別の過去帳を作つてゐるものもあるが、これを一步すすめて、その各戸別の欄に現在の家族や生れた子の名を書きつらねればそのまま現在帳にもなるわけである。

寺院の役目が葬式法要に限られたことには色々の原因もあるだろうが、その一つとしては、過去帳とて、過去のことにみに拘わつて現在に、そして更には未來に目をむけることを怠つたことも大きな原因をなしていることは確かである。

緑蔭に涼を憩うて、うとうとまどろみつつ昨冬逝つた老僧の面影を描いていた私の心にゆくりなく浮んで來た過去帳の夢であつた。

の 主 法 尾 椎

第一信 ハワイ

(宛氏智良藤佐)

この度の渡米に就て色々御厚配に預り難有御かげにて機上無事天人の如く安らかに豊かによき味に、

稻田君と共に、夕刻目ざめ島で晚餐、湯川博士と散策、その淨土宗に(實家も養家も)歸することなど承り二日(こちらでは一日)二時間おくれ九時着、羽田の湯川氏や水泳選手以上の歓迎をうけレイに埋もれ日本國民のメッセージや

平和への念願、アメリカに於ける任務、佛教の將來、佛教原理と實際生活など話居ります。就中最後のものは毎日午前に各宗開教使と篤信者會員に夜は五重をと四日以來の連續にて定講となつたので朝から夜までとはいへ、乍ら初三日より少しは稍落つき漸くこの小信をしたゝめることになりました、こちらは稻田も宮本、太田、藤花、各宗も名護、小林北島開教使も元氣です。本日は關、無垢品等紐育佛教大學建設志願者方とも會食本部、シカゴ、ボストン、紐育、ワシントンへも廻れとのことで時日スケジュールが許せば急行する積りです。風光明美、荒れたる内地觀光は如何かと存じましたら、必勝會など今尙日本の敗戦を信じないものによき現證となるということです。ハワイ大學の後援書館や廣き設備に學長の社交的にすら學ぶべきもの多きを見ました。

今七日には午前講演に引續き各宗監督の歡迎會に臨み米ソの居中、日本の平和使命にも、ハワイの地位使命を感じる以上に佛教の日本的立場を世界化するに特に布哇地位を説き、協同運動に示唆しました、眞宗の藤谷監督の好意により三四十哩ドライブしました、七日夕、これより五重第四日始まる。

×

×

×

限りなき彼岸へ

——戦犯教誨にあたり——

佐山學順

私は、佛教とくに淨土の教の上に立つて教誨する任務をおびて、シンガポールに渡つた。先ごろ、本誌のもとめに應じて、その間に接したいくたの戦犯者の佛教にみちびれた心の姿を、些か記したが、信仰は理窟ではない。特に他

力教の教相は理性を超越した信仰である。科學は地上のものである。有限を以つて無限を知ることが不可能の事である。無限の境界は知ることにあらずして信ずる事である。

かというと眞正面から人間の理性を否定して無條件に經文と念佛救人を信ずる事は容易でない。況んや平常人の平常心に於ておやである。そこで私は佛教の眞理を説くに現實と科學を肯定して、不可知の世界を知るでなくて信ずる事によつて救はるる喜を感じ、有限のそして無能の凡夫が無限の力と恵そして有能の絶對者たる佛に救はるゝの次第を私の所信によつて披瀝した事である。絶對境地の人々には

理窟ぬきの信仰談を其まゝ受入れる人もある。然し一面には世間の知識と平生の無信心が邪魔する、理性の人間としては當然である。

「私は有限である」

此の自覺をする事が第一であると説いた、私は時間的にも空間的にも有限の存在である。そして私は所謂煩惱具足の罪人であると自覺する事が淨土信仰の入門である。我が生命は風前の燈という善導大師の言葉も誇張ではない、我は自己の生命の實在を妄信する、然し他の死を見聞し、自己の老齡を直視する時、無常觀を自身に體得する、戦死戦災による無常敗戦の無常を國民等しく味つた事と思ふ。

「無限なるものゝ存在」

無能少根の私の彼方には萬能大用の不可思議力がある。私は此の不思議力の發動によつて今生に生れたものと信ず

る、勿論父母は私の直接親である事には相違ない。然し親だつて有限無力の人間である、親だけの力によつて、萬人等しく、違つた親より同じ四肢五體を具えた人間を造つたと思ふよりも、何等かの大きな力が、恵が、父と母を通して我を生ましていたゝいた事と信ずる。結局は大なるそして無限なるものゝ恵である、因縁といふが、それは無限なる恵の御計ひである、更らに

「私の周圍の一切の存在は恵の力」

の表現である。思へば、山河草木、花鳥風月皆これ私を育て、私を喜ばせ私を樂ませる恵の力の顯れである。日は輝き月は照るにつけ恵の難有さを感謝せずには居られない、法然上人の歌に「月影のいたらぬさとはなけれどもなかくも人の心にそすむ」月を見て泣く人も恨む人も、平氣の人も様々あるが、私には「私の爲めに」との御計らいと喜び感謝し難有い存在と拜觀して居る、然し一面には

「私を害する力の存在を」

認める、即ち天災地變風雨災厲の大自然の力と、人間の本能と思はゞ煩惱の障りである、然し私には生れ乍らにして無限なる大靈の分靈が與へられた恵がある。これは人間にのみ特に附與された恩寵である、動物にも靈ありといふが完全に發達し得る靈は人間にのみ見る、此の靈が肉體に結びついて知情意の開展となる、私は天の聲を聞く、「人間よお前には害する力が朝夕に働いて居る、お前には雜多の苦

痛がある、然しお前には、此の害と苦を防ぐように靈の力を與へてある筈だ、此の靈を磨き、正しき智慧と、暖かい情愛と善惡を識別し實行する意志が働く能力を與へてある。單に防ぐという計りでなく、此れに調和し、害を變じて利に、禍を福に、迷を轉じて悟を開く能力をさへ與へてある、こゝに人間の活動の本性を豫定して居る、活動の中に、喜びと樂みと發達を味ふ事が出来る、働きは神聖である。働く者は幸なり、此の眞理を自覺せよと」

不斷の説法を感謝する、人は此の世に苦がなければと願ふ、それは迷である、苦あるが故に働きあり、それによつて人の世に生をうけし喜びがある、私は子をもつ親の幸福を思ふ、世の親は子のために苦勞をする、その苦の中に無上の喜があり、人として生き甲斐がある。天地無限なる恵は人を苦めん爲めに害力の存在を許し玉ふものにあらずして、人を喜ばし進歩發達せしめんとする恵の御計ひであると感謝する、「天人をして事をなさしめんとする時先づ其人を苦しむ」と現今日本國民は「天、日本をして大ならしめんとして先づ國家國民を苦しむ」と信ずる時現在苦を忍び、眞の日本建設の無限なる恵であると信じ國民の奮起を促したいと思ふ、近所の家に丸山鶴吉氏の歌を見た、

日日のつらき勤もみ佛の人になれよの恵なるらむ
よい教訓である。

「靈の存在を信ずる所に佛の實在」

を信する。佛教では佛性といふ、一切の衆生悉く佛性を有すと、佛性あるが故に人間の尊嚴がある。天上天下唯我獨尊は萬人共通の人權を示すものである。民主主義の價值はこれに基づく、特に佛教の根本主張である。

教育家フレイベル氏は「教育の唯一の目的唯一の終局點は有限の中に無限を現じ、變移の中に永久を現じ、地上に天を現じ、人の中に神を現はすこと、即ち人の中に潜める神性を保育して生活の上に實現せしめる事である」と。宗教的の深みのある所に教育の理想が實現するものと信する。

「大なる惠の存在を信する時佛の實在」

を信する。私はこの天地の惠によつて生れ、そして生かされて來た。この無限の恩寵を感謝する時佛の實在を信する。「何人のおはしますかは知らねども、かたじけなさに涙こぼるる」の西行法師の歌が痛切に感ぜられる、佛教にては、惠を慈悲といふ言葉で表はされる。無限の慈悲なるが故に大慈大悲といふ。この大慈大悲を信する所に、佛の實在を信する。觀無量壽經に「佛心とは大慈悲是なり、佛、無縁の慈を以て諸の衆生を攝し給ふ」とある。私は此の慈悲の下に生かされ、人生を喜ばせていたゞいて居る。たゞ感謝あるのみ。靈に目覺めて一日を働き一日を喜びの下に生かされて行く。私は靈を通じて、佛の不斷の說法を聞かされて居る。そして見捨てたまはざる光に照らされて幸福の人生を味はつて居る。難有い極みである。

「大慈大悲の御計ひによつて永遠に」

生かさるゝ無上の喜を感じる。生きては佛の照益を受け、死して、佛の御來迎の下に永遠に生かさるゝ。生きても、死んでも、あなた任せである。死後はどうなる。私にはわからない。極樂はどうか。私は知らない。たゞ無限なる大慈大悲の御計ひを信じて、永遠に生きる。極樂は、眞善美の究極と信じて憧憬の樂土、理想郷と信じて居る。

「佛は是れ無量壽佛、無量光佛」

なりと信する、天地は無限である、惠の力は無盡藏である。佛は即ち無限なる身色である、天地と共に永遠なるが故に無量の壽佛であり無量の光佛である。

南無阿彌陀佛とは、此の無量なる大悲に南無する事である、南無とは歸命する、つまり御計ひに任せて安心する事である。そして廣大なる慈悲を感謝する事である、無常の風吹かば吹け、いつでもどこでも佛の救の御手はまつて居る、煩惱の罪障つもらば積れ、どんな場合でも、佛の不捨の光明に照らされて居ると感謝し、感謝すればこそ報恩行の日送りに精を出す、彌陀とは有限といふこと、阿は否定であるから、阿彌陀とは「有限ならざるもの」即ち無限なる佛である、所詮有限の私は無限なるものに生かされて歸入する、其念願と法悦を表徴する事が、南無阿彌陀佛といふ。

「佛像や位牌に拜する事は」

有限を以て無限を見る、有量を以て無量を計る事である、アメリカでも國旗を神性視して國民教育にも重大に見て居る、つまり目に見えない理想を、目に見える物を透うして知る事である、桿、布、星條といふ有限を以て無限なる理想にあやかる。佛像を單に偶像崇拜と輕蔑するのは矛盾である。佛身廣大にして凡夫の見所、知る所にあらざれば有限を透うして無限の存在に感謝し歸命するのである、親の位牌にぬかづく心理はあやしまずに行ひ得る、況んや人間に親みのある相好圓滿の佛像の前に坐る時、無限なる佛の恩寵を感得する。

「生きては佛陀大悲の光に浴し死しては願を彌陀の攝取に」

與づかる、死生はあなた任せである、生の問題も煩惱具足の身の上には解決出来ない、況んや、下根暗愚の身が自分の力ではどうして死の解決が出来るであろうが、他力淨土の信仰は、大慈大悲を信じて生を感謝し、不可思議の御計ひを信じて死に臨んで安心決定する事である。

此の他力の信仰が、地上の何物も救ひ得ない死刑者の最後に如何に役立つたか、其最後を見送つた私は又、他力の信仰に再生した事を喜ぶ、教ふる自分が教へられた事を感謝する。

教 と 導

趙州從諗和尚は、とし六十一歳のとき、はじめて發心して道に志し、諸方を遍歴するにあたつて心に誓ひました。

七歳の童子であつても、もし我に勝るならば、我は即ち彼に道をたづねよう。百歳の老翁であつても我に及ばなければ、我は即ち彼を教へよう。

と、實に尊い心であり、何人も學ばねばならぬ志であります。しかしこれを實際に行ずるには命がけでなければできないことでもあります。

元來、私共が知つてゐることも、信じてゐることもみな教へられ導かれたものであります。教へられ導かれ、また教へ導くのがお互の人生であります。「上は菩提を求め、下は衆生をみちびく」ことが、佛教徒の發さねばならぬ菩提心といはれるものであります。

眞に他を教へ、導く人は、つねに學んでゐる人であります。教へられることによつて、教へることができ教へることによつて教へられるものであります。

浄土の會員を

一人でも多く

◇どなたでも會員になれます。

◇會費は半年一三八圓、年額二七六圓です。

◇會員には毎月「浄土」を配布します。

◇この會はみなさまの會ですからその發展のために、お一人でも多くの會員をつくつて、正しい信仰運動をひろめませう。お知合の方々にぜひおすすめ下さい。

◇お申込には振替（東京八二二八七番）を御利用下さい。

芝園だより

◇編集の意外の手ちがいのために今月號が完全に時日を失しておくれてしまいました。毎月發刊が、すこしでも遅れますと、どうしたのかと多くの會友からお問合せをうけます。お詫びいたします。

◇一日は關東大震災記念日、そして二百十日、ジェーン颱風の關西の方々の苦難を偲ぶとともに、天災が避けることができないもの忘れた頃に来るものではあつても、「心のねぢ」をまくことで之に對處できることも思いたい。

◇二日は忘れがたい降伏記念日、この方は避けることができないのではなく、自ら起した戦争の結末であつた。「ねぢ」を世界の願ひに逆つてまききつたものである。自然の、あるいは人爲の、いづれにせよ、災と名のつくものをこの地上から消してゆきたい。

◇廿三日の土曜は秋分の日で、休みが二日つく。廿六日は中秋の名月、秋はしづかに心にしみとほつてくる。騒音の巷の中にさえ、この新秋の清氣は感じられる。

◇巷塵の世の中にあつてさえ、眞に信仰を生活の中に生かしている人々は、知られようとすることなく、眞實の路をしづかに、そしてつよく歩いている。このごろ妙好人の研究が盛になつてきたのは人々がそうした眞人の姿の中にこそ眞實を求めようと、目覺めてきたからだ、東大の中村元博士が指摘されている。

◇この點で、本誌の「現代妙好人傳」は大きな使命をもつている。しかし地方にかくれた篤信者の言行をあつめ記すことは容易ではない。阿川先生のこの御苦心に地方會友の方々の御協力をお願いする

◇阿彌陀經を詩譯された伊藤先生の「浄土讃歌」は各方面に大きな反響を呼ぶものです。作曲を附して、現代佛教音楽に一新路をひらくものとして。佛教は、現代の音楽を忘れすぎている。先生は本

誌のこの企劃に今後も心から御支援下さいます。近代社會に眞に佛教を生かすために、積極的にならませう。（藤田）

入會購讀御希望の方へ

會費半年金百三十八圓を、便利で安全な振替で御送金下されば、着次第御送本申上げます。

「浄土」 九月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和廿六年八月二十五日印刷
昭和廿六年九月一日發行

（定價貳拾圓）

編輯兼 眞野正順
發行人

印刷人 春山治部左衛門

印刷所 共立社印刷所
東京都千代田區神田神保町三ノ十

發行所 法然上人鑽仰會
東京都港區芝公園五ノ二〇

振替東京八二二八七番
會員番號B一〇八〇一四

會費半年金百三十八圓（送料共）

信仰を求め人必讀の書
宗教を知らんとする人

現代人の混迷せる意識にはつきりと
方向を與える

大正大學助教授

竹中 信 常著

宗教への思慕

——現代人の宗教概論——

価百二十円 送三十円
A5版百頁 鮮明脱寫

暗澹たる人生行路に輝かしい信仰の
燈火を點する

社會科教師用テキストとして最適

申込所 東京都港区芝公園五の十

法然上人鑽仰會

振替東京八二一八七番

淨土トラクト既刊

心の糧となる内容、親しみ易い文章、雅味のある装釘、そして誰もが氣輕に手にできる廉價——淨土トラクトは各方面に好評をもつて迎えられています。

お十夜の話 藤田寛雅著 四圓送六圓

お彼岸の話 竹中信常著 四圓送六圓

お盆とおせがき 佐藤密雄著 四圓送六圓

文書傳道は現代的要求です。讀むことによつて信仰の歩みを進めてゆく上に、また生活文化としての佛教への常識、教養をたかめる上にも、最適の良書、施本等に御活用下さい。必ず良き心のみのりが得られます。

法然上人鑽仰會